

学位論文審査の要旨

学位申請者	初澤 宣子 人間発達科学専攻 2013年度生		論文題目	文学教材を通じた感情体験の探究 —小中学生用文学読書体験尺度の作成と 仮説モデルの生成—
審査委員	主 査:	伊藤 亜矢子 准教授	インター ネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	篁 倫子 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	石丸 径一郎 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	浜口 順子 教授		<input checked="" type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	刑部 育子 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (学術) (Ph. D. in Psychology)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文の審査は、第1回が令和元年8月7日、第2回同年10月30日、第3回同年12月18日に行われ、最終試験が令和2年2月12日に行われた。

本論文は、文学教材を用いた予防開発的な心理教育を念頭に、読書が子どもにどのような感情体験をもたらすかについて、読書体験についての自己変容感情仮説(Miall & Kuiken,1995)に基づく尺度の作成とモデルの量的・質的検討を行ったものである。

第1・2章では、本論の理論的枠組みとして、先行研究の概観と自己変容感情仮説に基づくモデルの提示を行った。読書を用いた心理教育Social Emotional Learning(SEL)と、SEL関連の効果をもたらす自己変容に関わる読書による感情体験について先行研究を概観した。その上で、読書による感情体験の定義を示し、自己変容感情仮説による本研究で検討する感情体験のモデルについて述べた。

第3・4章では、自己変容感情仮説に基づく尺度の作成を行った。研究1では、発達段階として体験の省察が小中学生より可能である大学生を対象に、自由記述により読書による感情体験を収集し、他の尺度や自己変容感情仮説に照らして大学生用の文学読書体験尺度を作成した。研究2では、それを基に、小中学生用文学読書体験尺度を作成し、小中学生においても自己変容感情仮説で仮定された感情体験が読書によって生起していることを確認した。

第5・6章では、作成された尺度を用いて、量的・質的実践的に小学生の読書中の感情体験を短期であるが縦断的に探索し、読書を用いたSELの効果と、効果をもたらす読書による感情体験について探索的に検討した。結果として、量的検討では、小学校高学年において自己変容感情仮説の4つの感情が、それぞれ悲しみの緩和や怒りの抑制などのSEL関連の効果をもたらすことが示された(研究3)。質的実践的検討では、小学校低学年における全14回の国語授業において、SELの要素を持つワークシートを加えることで、自己変容感情仮説と符合する感情体験が生じ、国語の教科学習を兼ねたSEL実施の可能性が示された(研究4)。

第1回審査会では、各研究の位置づけを含む論文全体の論理的な統合や、分析及び文章表現の改善が求められた。

第2回審査会では、特に質的研究部分について、論文全体との整合性や位置づけについて改善が求められた。

第3回審査会では、大きな指摘事項はなく、文章表現等について若干の指摘があり、公開審査に進むことが決定された。

これら審査の過程で、論文全体の統合度が高まり、モデルの精緻化もなされ、文章表現等も改善された。公開審査においても、的確な発表と質疑応答が行われ、最終的に合格とされた。